

WORLD TRAVELLER



Sicilia, nostalgia e nacente

懐旧と新生の、シチリア。

海はひたすら青く澄み、日差しはすべてを見透かすように強く降り注ぐ。
地中海世界の真ん中に浮かぶトンガリ帽の形をした島、シチリア。
古くから多様な人びとが立ち寄り、彼らが落としていった思いと物語が層をなしている。
この島は旅人の古い記憶を蘇らせる。旅人は、それを日に晒し、海水で洗って、また新たに生きていく。

Photography by Taisuke Yoshida Text by Yasuyuki Ukita
Special thanks to Assovini Sicilia, Gheusis



タオルミーナ、グランド・
ホテル・アトランティス・
ベイから眺める朝の海。青
のグラデーションが美しい。



タオルミーナのナツィオナーレ通りは、海を眺めながら歩くのに最高の道。早朝、漁場へ向かう小さな舟をカメラが追う。

“すべてに通じる鍵”を旅する

朝 まだき、タオルミーナの海はあまりにも穏やかだ。ビーチに人影はなく、小波の打ち寄せる音すらしない。水は清明そのもの。水底の貝類や海綿動物の色彩がはっきりと見て取れる。海と呼応して、旅人の心は真空のようになる。本来、ヴァカンス(vacance)とはこの真空のことを言うのだ――。

シチリアはどこにあるのか？ それがイタリアの、長靴型をした半島の爪先のすぐ先に浮かぶ島だということは多くの人が知っているだろう。試みに、より広域の地図を広げてみると、シチリアが地中海世界の真ん中に位置していることがわかる。この立地ゆえに、シチリアは紀元前の昔から多様な国家・文明に利用され、続べられてきた。逆に言えば、シチリアは多様なカルチャーやライフスタイルを吸収し、蓄積してきた。ゲートは『イタリア紀行』のなかで次のように述べている。
〈シチリアなしのイタリアはわれわれの心に何



(左) 朝食の準備を始めるスタッフ。グランド・ホテル・アトランティス・ベイにて。(上) レトロな佇まいのタオルミーナ・ジャルディーニ・ナクソス駅はいくつかの名画にも登場。



Grand Hotel Atlantis Bay

グランド・ホテル・アトランティス・ベイ
Via Nazionale, 161-98030, Taormina Mare, Sicily
Tel +39 492 61 8011
<http://www.atlantisbay.it/en/>

WORLD TRAVELLER SICILIA



壁と同化したように見えるテラコッタの水瓶。この淡い色合いもシチリアの色彩のひとつだ。

の像も結ばない。シチリアこそはすべてに通じる鍵なのだ。実際に訪ねてみると、シチリアは「大きな島（面積は九州の約3分の2）」というよりは「小さな大陸」だということがわかる。アフリカから熱風シロココが吹いてくる一方で、エトナ山（標高3326m）の頂には雪が積もる。複雑に入り組んだ海岸線があるかと思えば、緑なす沃野や無辺の荒野もある。その多彩な顔は、とても「ひとつの島」として括れるものではないのだ。

シチリアのイメージは映画から得たという人も多いだろう。どちらも古い作品だが、『ゴッドファーザー』と『グラン・ブルー』がその代表格ということになる。前者は、シチリアを「マフィアの島」というイメージに染め上げてしまった。シチリア人は初対面の時に表情が硬く、強面の印象を与える人もいる。それがマフィアの島のイメージを増強してしまった部分があるかもしれない。が、彼らの無表情の下に隠れているのはシャイであり純粋である。いったん打ち解けると、彼らほどハートが温かく、世話焼きな人びとは滅多にないことがわかる。一方の『グラン・ブルー』は、1988年に公開されると、フランスや日本の若者たちから圧倒的な支持を得て、一種の社会現象となった。ロケ地のひとつだったタオルミーナには、今でも、映画の中のイメージを求めて多くの人を訪れる。そんな“巡礼者”たちが海辺で思い出すのは、主人公、ジャック・マイヨールのあの台詞かもしれない。

「海底はつらい。上がってくる理由が見つからないからだ」
タオルミーナから、近郊の村、サーヴォカを訪ねた。つづら折りの山道の先にある人口1600人ほどのこの村は、『ゴッドファーザー』の重要なロケ地のひとつだ。アル・パチーノ演じる若き日のマイケル・コルレオーネが地元の女性アポロニアに一目惚れし、プロポーズする場面。その舞台となったパール・ヴィテリが撮影時の姿のまま、今も営業している。しかし、映画の撮影からすでに40年以上も経ち、当時のことを覚えている人はいない。近年、村は「イタリアの最も美しい村」の一つという別の魅力でツーリストを引きつけている。村の名物は、ズッカラータというビスケットを添えて出されるレモンのグラニータ。遠い記憶の襲いに分け入っていくような味がする。



Bar Vitelli

パール・ヴィテリ
Piazza Fossia 7, Savoca, Sicily, Italy
tel +39 334 922 7227

(左) サーヴォカの教会へと向かう道。地元の石を積み、土を焼いて作った建物が自然と調和している。教会は『ゴッドファーザー』の婚礼シーンのロケ地でもある。(上) パールの一角に飾られていたレモンと白い花。特産のレモンでグラニータを作る。(下) パール・ヴィテリ。この入り口にピンと来た人もいるのでは？

マグマを感じさせるワイン

夕 オルミーナが「海のシチリア」の代表なら、エトナ山とその周辺は「山のシチリア」を代表する場所ということになる。エトナ山はヨーロッパ最大の活火山で、白い噴煙を上げる姿を毎日拝むことができる。雪を頂いた孤高の山容は、見る角度によっては富士山を思わせるが、比較すると、エトナ山のほうがなだらかで女性的な印象を与える。この活火山がマグマと噴石と火山灰によって形成した火山性土壌はワイン用のブドウに独特の風味を与えるとして、近年特に評価が高まっている。赤はエトナ・ロッソ、白はエトナ・ピアンコという呼称を持つこの地のワインは、土地固有の品種で造られ、フレッシュでエレガント、味わいに火や地熱を思わせるニュアンスがある。近年、世界的な風潮として、ワインは冷涼地で造られるもののほうが味わいが繊細・複雑になり上等とされるが、その

点でも、エトナ山周辺では標高1000mを超える高地にもブドウ畑が開かれていて、「南の島の冷涼地」として認知され始めている。エトナのポテンシャルに目をつけた生産者がシチリア島外からも進出、もともとこの地でワインを造ってきた既存の生産者も刺激を受けて、全体のクオリティが向上するという好循環が起きている。品種名を挙げておこう。赤ワイン用ではネレッツロ・マスカレーゼ。熟れた赤い果実の香り、やや薄めの色合い、存在感のあるタンニンが長期熟成の可能性を語る。白ワイン用では、カッリカンテ。ピュアな酸を持ち、うまく熟成させるとリーズリングのような風味が出てくる。旅先で地ワインを開けることに勝る幸せはない。シチリアを訪ねるなら、ぜひ「ガラスの中のマグマ」を体験していただきたい。



(右) パローネ・デイ・ヴィラグラランデのエトナ・ピアンコ。サンザシの花の香りがする。(左) 18世紀からこの地でワイン造りを行ってきたニコロジ・アズムンド家の新世代、マルコとカルラの夫妻。

Barone di Villagrande

パローネ・デイ・ヴィラグラランデ

<http://www.villagrande.it>



(上段) トルナトーレの経営者一族。醸造タンクはボルドーのシャトー・シュヴァル・ブランと同じ最新設備。(中段・右) エトナ・ロッソは酒脈が厚く、飲みごたえのあるタイプ。(中段・左) ワイナリーのランチで出てきたヴェルドゥーラの炒め物。(下段) 牛、豚、イノシシの肉を使った贅沢なソースで食べるマッケローニ。肉料理を見ることが少ないシチリアにあって、最高のもてなし料理だ。

Tornatore

トルナトーレ

<http://www.tornatorewine.com/index.php/it/>



Graci

グラチ

<http://www.graci.eu>

(右) グラチのエトナ・ロッソ。口当たりにティンパニーの響きのような張りがある。(中央) 工業化されたワインに対し、自分のワインは「アルチザン・ワイン」だと、グラチのアルベルト・グラチ氏は主張する。(左) 冠雪した4月のエトナ山。山麓一帯は火山性土壌がむき出しの、極めて複雑な地形になっている。